

会津人群像

2010
no.16

aizujin **季刊** gunzō

特集

飯沼家に伝えられた

白虎隊の真相を語る

「真の尊王」と「偽の尊王」
萩地方に伝わる『白河おどり』



特集

飯沼家に伝えられた

白虎隊の真相を語る

巻頭グラビア

1 会津人群像 白虎隊士のおもかげを追って――

12 特集にあたって 飯沼一元さんとの出会い 滝沢 洋之

14 幕末の会津藩 星 亮一

24 白虎隊の戦闘行動と 飯沼 一元

白刃の決定プロセス

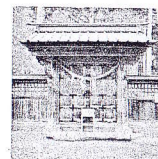
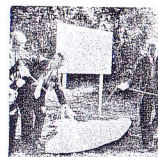
付録 白虎隊顛末略記 42 / 白虎隊の人員 46

48 長州・斗南と会津白虎隊

48 飯沼貞吉と檜崎頼三 土屋 貞夫

51 白虎隊と長州人―神意について断想― 山本 貞壽

56 日本最初の白虎隊士の墓碑 大庭 紀元



白虎隊の戦闘 行動と 自刃の 決定プロセス

飯沼一元

一 はじめに

白虎隊は年齢が一六、一七歳の会津藩軍隊で、士中白虎隊、寄合白虎隊、足軽白虎隊の総勢約三〇〇名で構成され、悲劇の対象となったのは、士中二番白虎隊である。戊辰（一八六八年）八月二十二日に、西軍（新政府軍）が鶴ヶ城に迫りつつある中、藩公の護衛を任務とする士中一番、二番白虎隊士に出陣命令が下った。そのうちの士中二番隊三七名は隊長日向内記の指揮の下に戸の口原前線に出陣したが、西軍に圧倒され、一九名が死亡し、生存者は僅か一八名という惨事が起こった。会津飯盛山にはこの時死亡した白虎隊一九士の墓が建てられ、いまなお、多くの参拝者が訪れている。死んだ原因が、少年の「集団自刃」であることから、彼らの忠烈果敢な行動が長く、広く語り伝えられている。ところで、出陣した三七名がそれぞれどのような行動をとった結果、生還、自刃、戦死したのかについては、詳細が分からないままになっている。また、集団自刃の理由は「お城が燃えているのを見て落城したと思い、殿の後を追った」という単純な「錯覚説」で済まされている。その理由は、生還した一八名

の証言記録が殆ど残っていないため、事実上「闇の中」となり、解明の手がかりがなかったためと思われる。その中で、平成元年に発見された酒井峰治の『戊辰戦争実録』には、石田和助、伊藤俊彦、石山虎之助という自刃組と、山内小隊長、伊藤又八の生還組の氏名が登場し、さらに、「何度も自刃しようと考えたが、愛犬クマに出会って、生きる勇気を得て城に辿りついた」などという、彼らの心理状態に関する重要な手がかりを与えてくれた。

二〇〇八年六月に、栃木県那須塩原市の飯沼貞雄孫飯沼一浩宅に保管してあった貞雄遺品の中から、貞雄自筆の新文書『白虎隊願末記』と『白虎隊の人員』の二件が発見された。飯沼貞吉（後に貞雄に改名）は飯盛山自刃組の一人で、奇跡的に蘇生した唯一の人物である。従って、ここに、生還組と自刃組の双方の証言記録が整ったことになる。本稿はこれらの新文書を元に、三七名の白虎隊士の戦闘行動と自刃の決定プロセスを解明しようとするものである。

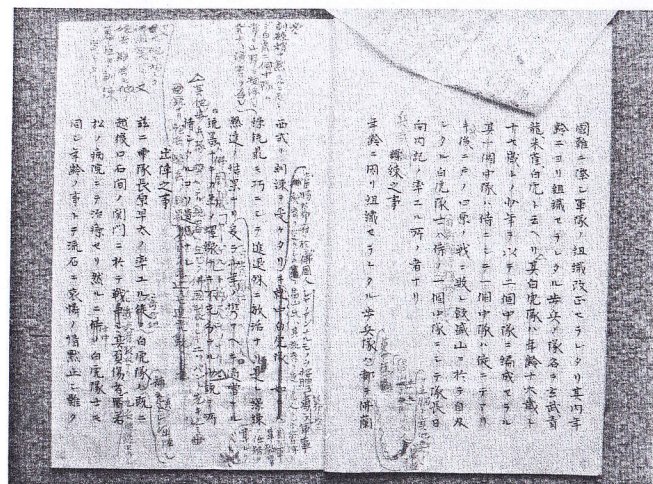
二 新文書の性格

本文末に全文を注釈付きで掲載するが、これらの文書が、誰が、何時、何の目的で書いたのかについて、筆者の推定を含めて解説する。なお、推定の根拠については、本稿の目的から外れるので、詳細を省略するが、機会があれば別稿としたい。

二-1 『白虎隊願末記』

（原本は『白虎隊願末略記』となっており、以降『願末記』と略す）

貞雄は明治二十四年八月から通信省の広島電信局に勤務していたが、一年三ヶ月後の明治二十五年（一八九二）十一月三十日に東京転勤の辞令を受けた。そこで、広島市上流川町の戸枝氏宅で送別パーティが開かれ、士中二番隊の原新太郎氏（原鏡三郎）も同席した。原氏は、自刃した安達藤三郎、篠田儀三郎と日新館尚書塾に於いて共に教育を受け、竹馬の友だったが、帰城して籠城戦を戦った人物。この席で、貞雄は飯盛山での自刃に至る経緯について話した。



貞雄が朱筆を入れた『白虎隊願末記』の一部

原氏はここで初めて詳細を知り、これを明治二十七年一月同市鉄砲町においてメモ書きし、その後、明治三十五年（一九〇二）十月に仙台通信局に勤務していた貞雄宅を訪ねて清書した。題名は『会津藩白虎隊一打書』で、その内容は、教育之事、隊名之事、兵士訓練之事、出陣之事、戦争之事、会合之事、飯盛山

に登る事、自刃之事で構成され、全部で二〇ページ。このうち、教育之事、隊名之事、兵式訓練之事の三項目については、貞雄談ではなく、原氏が後で追加したもの。

明治三十七年に貞雄は原氏が清書したこの一打書に朱で加筆・修正し、題名を『会津藩白虎隊顛末略記』に変更し、巻末の「時に」以下にある原氏の記載事項を削除し、旧会津藩士で仙台市の陸軍第二師団豫備工兵軍曹関五郎殿宛ての文書に仕上げた。関氏は貞雄の長男一雄（明治十五年生まれ）の上司にあたる。

この文書は以下の三点で歴史的に重要である。

(二) 出陣した三七人の士中二番白虎隊士のうちの生還組と飯盛山自刃組という二人の異体験者の合作であること。

(二) 貞雄談メモを元に、原氏が記録文書として体系を整えて清書した元文書に、陸軍第二師団への提出用とするため、貞雄が更に推敲を加え加筆修正した鋳られた文書であること。

(三) 特に、会合之事、飯盛山に登る事、自刃之事については、本邦初の資料であること。

三 白虎隊の戦闘行動

白虎隊（士中二番隊）の戦闘行動の分析には、体験当事者の残した一次情報を使つた。貞雄に関しては、新文書の他に、貞雄が出入りの絵師梅里に描かせた『白虎隊奮戦の図』、明治四三年に河北新報に七連載された『飯沼貞雄談による白虎隊実歴談』を参考にした。これらに、酒井峰治の手記『戊辰戦争実歴談』、

三十一 出陣から滝沢本陣まで

() は筆者注。

昭和十一年三月迄之
嵯峨賴三陣中日記

陽會賊王余マ野マ泊マ于亦水也マ乘マ其賊勢マ巡視マ于猪苗代マ
師陣マ
廿マ晴朝マ火雨マ二字聲陣マ先鋒マ少戰マ賊人于マ驚マ亡マ進マ于會城マ
郭門マ進マ賊防戰マ力マ味マ于盛マ進擊マ終マ左右マ城マ郭門マ
賊人又進マ城門マ迫マ于賊營マ防禦マ于激戰マ村中于項死傷マ于圍マ
二蒲合マ二百余マ即マ四着マ陽兵乘マ賊郭マ于賊家マ燒マ之マ于退マ

『榑崎頼三陣中日記』の表紙と8月23日付け日記の一部

白虎隊士分隊別氏名リスト

士中二番隊 (37)	篠田隊 (17)	篠田儀三郎、安達藤三郎、西川勝太郎、野村駒四郎、築瀬勝三郎、築瀬武治、間瀬源七郎、林八十治、永瀬雄次、津川喜代美、飯沼貞吉、井深茂太郎、有賀織之助、鈴木源吉、伊東倅次郎、池上新太郎、津田捨藏
	山内隊 (20)	城取豊太郎、笹原伝太郎、遠山雄牛、多賀谷彦四郎、酒井峰治、石山虎之助、石田和助、伊藤俊彦、庄田保鉄、篠沢虎之助、原鏡三郎、藤沢啓次、片峯祐之進、永野兵太郎、成瀬善四郎、宮原三四五郎、矢島八太郎、吉田鋸之助、伊東又八郎、坂井峯次
	原田隊 (臨時編成) (7)	井深茂太郎、有賀織之助、鈴木源吉、城取豊太郎、笹原伝太郎、遠山雄牛、多賀谷彦四郎
飯盛山墓碑 19人+1人	飯盛山自刃者 (17)	篠田儀三郎、安達藤三郎、西川勝太郎、野村駒四郎、築瀬勝三郎、築瀬武治、間瀬源七郎、林八十治、永瀬雄次、津川喜代美、井深茂太郎、飯沼貞吉(後蘇生)、有賀織之助、鈴木源吉、石田和助、伊藤俊彦、石山虎之助(連れて自刃)
	戸の口原 戦死者(3人)	伊東倅次郎、池上新太郎、津田捨藏
合同白虎隊 (15)	再編成 (幼年組み除外)	城取豊太郎、笹原伝太郎、遠山雄牛、多賀谷彦四郎、酒井峰治、庄田保鉄、篠沢虎之助、片峯祐之進、永野兵太郎、成瀬善四郎、原鏡三郎、藤沢啓次、宮原三四五郎、矢島八太郎、吉田鋸之助
隊長・小隊長・半隊長		
		中隊長：日向内記 小隊長：山内弘人、水野祐之進(行動不明) 半隊長：原田勝吉、佐藤駒之進(行動不明)

初めて出陣するを得たり。君側の護衛、其の任甚だ重けれども、腕に武術練の覚えあり、且つ奇合組白虎隊に先ぜられたるを遺憾とする少年、今は早や戦わんとする

わりて指揮を執るの制なりき。故に、演習其の場合に於ては、渾て此の規定に基づき、履行し来りたるものなり。(中略)
一番小隊教導篠田儀三郎にして、之れ

の血氣制し難く、直に戦場に臨まんことを隊長に請い、遂に其の日の午後、戸ノ口表へ出陣の命令を受けたりき。
貞雄は『白虎隊の人員』の中で、次のように記している。(一)内筆者注。各一隊(中隊四〇名)に隊長一名(日向内記)を置き、(中隊を二分して小隊とし)、各小隊に教導一名を置く。若し隊長事故あるときは、一番小隊の教導(篠田儀三郎)之れに代わり、又一番小隊の教導事故あるときは、二番小隊の教導(小隊長山内弘人)之れに代わりて指揮を執るの制なりき。故に、演習其の場合に於ては、渾て此の規定に基づき、履行し来りたるものなり。(中略)

前項に記したる如く軍制の然らしむる所なり。而して白虎隊は人員少数の為、小隊長を置かず、専ら教導をして小隊長の任務を掌らしむ、現時の曹長の如きものと存ぜらる。
これより、日向中隊は実質的に、篠田小隊と山内小隊で構成されていたと考えられる。そして、筆者の解析では、篠田隊は一七名、山内隊は二〇名で、隊士は上記の表に示すとおりである。

三―二 滝沢本陣から

会津軍宿营地まで

『頼末記』では、以下のようになっている。
茲に於いて隊士の怡悦大方ならず。隊伍肅々として滝沢、金堀、強清水等の各地を経て戸ノ口原の西端に至り、他の軍隊と共に戸ノ口街道左側の丘上に陣を張れり。ここで、他の軍隊について貞雄は『白虎隊の人員』で後日次のように補足している。
而して戸ノ口街道に駐屯せし他の軍隊は、歩兵二個中隊と外に敢死隊なるもの二百余名あり。其の敢死隊なるものは、会津領地内に居住する神官、僧侶若しくは各都村内に於て帯刀の許可を受け居たるものを

以てして、国難に応ずべき志望者より之を抜擢組織したるものにして、而して彼等の携えたる武器は、槍、又は長刀等にして、各自其の好む所に任ず。之れ敵の襲来を待ち、突貫せしむる為なりと云う。

一方、酒井はこの部分を次のように記している。
(一)は筆者付記。

二十二日、君公に従つて蚕養口に出る。時に塩見常四郎が戸ノ口原より駆けつけ、急ぎ出兵を促した。そこで半隊を滝沢の東へ進め、続いて残りの半隊を進めて先の半隊に合流させた。戦友は皆、喜躍して滝沢峠を越え、舟石に達すれば、敵軍の大砲の音が耳に入った。依つて舟石茶屋にて銃に弾丸を込め、携帯品を舟石茶屋に預け、とりわけ身軽になつて舟石茶屋より駆け足で強清水を過ぎ、約一丁半(一六二m)を行き、左方の小高い山に登り、ここに穴を掘り、胸壁とした。

時に官兵は四、五丁(約五〇〇m)の距離を隔て数千人いるのが認められた。これより戸ノ口原に踏み込むが、十五、六人の幕兵が喇叭を吹き、敵軍に向かっていった。(我々は)側の山に登り、身を隠して敵状況を窺った。(その状況は以下の通りである)

既に胸壁を築き、陣をなし、そして一戦を交え、我が軍に利があつた。敵は退き、更に大砲を牽いて来て戦う。二、三十名が駆けつけ、激しく戦つた。午後四時頃のことである。また、この山続きに於いて、十五、六人の幕兵が喇叭を吹き、闘っていた。時に我ら(が軍の)敢死隊の若干名が、和銃或いは鎗等を携えて進んで来た。

また、原田勝吉談は次のように記している。

(一)は筆者付記。
伊織翁は白虎隊の半隊頭たりし原克吉(原田勝吉)の後身である。曾て翁を二ノ丁の十軒長屋に訪うて、戊辰当時の実歴談を聴聞した。今や翁は他界の人となり、今昔の感に堪えず、記憶をたどりて大要を録せん。

我が士中二番白虎中隊屋並触に接して城内に詰めしたのは、八月二十二日の午後の一、二時頃であつた。中隊頭が日向外(内)記、小隊頭が山内蔵人に水野勇之進、半隊頭が自分と佐藤駒之進であつた。自分は城に詰めると、軍事方に掛合つて良い鉄砲を受取り、五人で頭分に調したが、頭分から五人に向つて懇篤なる御言葉があり、五人は感

奮し勇ましく御受を致し、隊伍を整えて城門を繰出した。
瀧澤までは若殿天山侯の御供を致したが、御本陣に着くと半分だけ戸ノ口に向へと命令があつた。意見を建白した結果、一同進軍のこととなり、勇躍して強清水に着いたのは日のくれぐれであつた。
先ず戸ノ口原の南部を守る味方の宿营地に加わり、第一の山に胸壁を築いて守に就いた。

(宿营地に着いた後)自分は隊長中の少壮者なれば、津田を嚮導として斥候に出た。人影のあるらしければ、匍匐して偵察した。(その後宿营地に戻った)

以上、三者の情報を要約すると、次のようになる。

- ①内記が率いる白虎隊士三七人は、滝沢から戸の口原の会津軍宿营地に向つて整然と隊列を整えて進んだ。
- ②宿营地に駐屯していた会津軍は、敢死隊(約二〇〇名)と歩兵二個中隊で歩兵は幕兵であつた。
- ③敵軍は近くに迫っており、幕兵は戦闘行動をしていた。

④白虎隊はここに胸壁を築いて守に就いた。
⑤原田、津田らは斥候に出た。柴五三郎編『辰のまぼろし』によれば、この時の、斥候隊は原田半隊長以下、井深茂太郎、有賀織之助、鈴木源吉、城取豊太郎、笹原伝太郎、遠山雄午、多賀谷彦四郎の七名で、篠田隊から前者三名、山内隊から後者四名を募った臨時編成と考えられる。

⑥白虎隊は、この時、未だ戦闘行為はしていない。

三三 会津軍宿营地から 戸の口原拠点Aまで

河北新報の取材記事には以下のように記されている。
(一)は筆者付記。

白虎隊がここへ到着した時は、彼れは午後六時頃であつた。そしてこの敢死隊と合併することになった。

然るに白虎隊の教導、即ち当今の特務曹長ぐらゐな資格の男に篠田儀三郎という仁がある。この男はなかなか確かな人物であつたので、今この敢死隊と合併するという命令に対して、熱心に不服を唱えた。つまりそれをば、甚だ潔しとしなかつたのだ。一隊六〇名(四〇の間違い)の面々

も又た、一議に及ばずして、篠田の意見に賛成した。そこでこれを隊長に申し立てて、敢死隊と離れて独立の任務に就くことになった。そして更に前進したのである。また、『顛末記』では、以下のように記されている。
(一)は筆者付記。

然れども尚進みて先鋒たらんことを強いて請いて止まず為に、白虎隊のみ独立行動の許可を受け、他の軍隊を離れ、十余丁(約一km)も進軍したり時に、細雨蕭々、日方に暮れなんとす。殊に進撃は明廿三日払暁と決しければ、戸ノ口原上に宿陣する事となれり。

明けなば討死と覚悟したる少年、三々五々彼の地此の地に団欒し、無言の中に慈母姉妹に別れを告ぐる折、飢えたるときの補いにも与えられたる食物を腰より取り出し、之を食らい、俱に文武を学びたるの既往を語り、又明けなば人に後れじとの心事を話し、寐る間もなく東天正に明けなんとす。

酒井はこの場面を、「白虎隊は、此処をその敢死隊に譲り」とし、原田談では、「若松より出張せし新撰組などに場所を譲り」とな

っている。白虎隊がここで単独行動に出たことは間違いのない。従つて、この場面は次のように要約できる。

①宿营地で他の会津軍に合流した後、白虎隊士三七人は独立行動に出て、宿营地から約一km離れた戸の口原拠点Aに移り、ここで一夜を明かした。拠点Aは現在の「奮戦の地」碑のあるあたりと思われる。

②独立行動に出た理由は、西洋式軍事訓練を積んだ白虎隊が、鉄砲も持たないにわか部隊の敢死隊と合同するのが不満だったからで、隊長は篠田の具申を受け入れて実行した。

そして、『顛末記』はその後を次のように表現している。

明けなば討死と覚悟したる少年、三々五々彼の地此の地に団欒し、無言の中に慈母姉妹に別れを告ぐる折、飢えたるときの補いにも与えられたる食物を腰より取り出し、之を食らい、俱に文武を学びたるの既往を語り、又明けなば人に後れじとの心事を話し、寐る間もなく東天正に明けなんとす。

なお、この部分に該当する情報は酒井文と原田文にはない。

三一四 八月二十三日早朝

(四時〜六時頃)の状況

これまでのところから、血気盛んな白虎隊士のはやる気持ちがよく伝わってくる。そして、いよいよ運命の日が到来する。

まず、この日の状況を長州藩第一大隊中隊長榎崎頼三はその二〇〇ページに及ぶ『陣中

日記』の中で、次のように記している。

廿三日 晴 朝少し雨 三時発陣、先鋒少々戦ひ賊十人計を斃し、進で会城郭門に迫る、賊防戦しかども味方盛に進撃、終に左右の垣を破り郭門を取る、又進で城門に迫る、賊盛に防禦し激戦、移時一時頃死傷を閲するに四藩合三百余、即

四藩隊長集議、郭内の賊家を焼失し少し退く、郭門を守り大砲を以城中に狙撃す、距離十丁余、此日、予隊野村傳重疵を負ひ大井梅次、中谷浅之助等も重疵、賊瀧沢峠より襲来の報あり、即ち三番隊繰出し、石川庄平戦死す、中村二郎も大手前にて傷く、嚴に守郭門激賞す。
そして、その前日の日記は次のようになっている。

廿二日雨 薩先鋒、三藩統之

進で猪苗代に至る、賊狼狽去る、当地泊、薩四五番隊兵具隊杯、我三四番隊杯は進で追賊十六橋を渡り瀧沢手前、隔 会賊吉里余にして野に泊す。予亦此地に至り賊勢を巡視し、猪苗代に帰陣す。

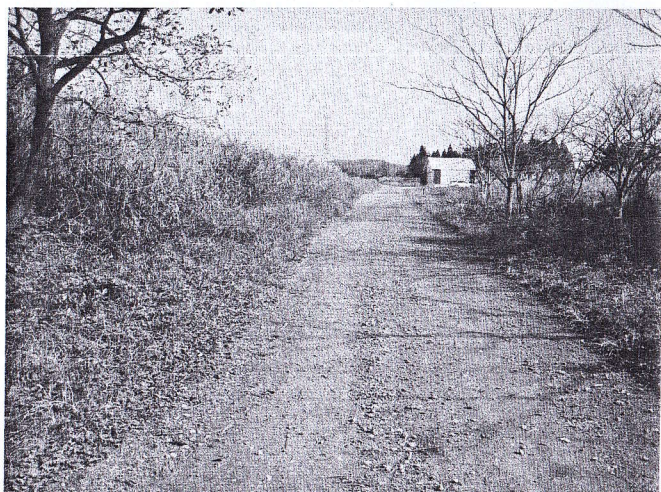
つまり、榎崎頼三の部隊は二十二日

中に十六橋を越え、瀧沢手前の会津軍との距離一里(四km)のところまで野宿し、翌日未明の三時に出撃を開始した。そして、会津軍と交戦したが、その戦いぶりには「先鋒少々戦ひ賊十人計を斃し」の一二文字で片付けている。交戦相手は白虎隊だった可能性もある。その後、直ちに鶴ヶ城に向い、城郭を突破し、午後一時には死傷者の点検をしている。西洋式軍隊として訓練され、元込め七連発銃で装備し、白河戦を制した長州軍と会津軍との戦力の差はいかに大きかったかを思い知らされる。

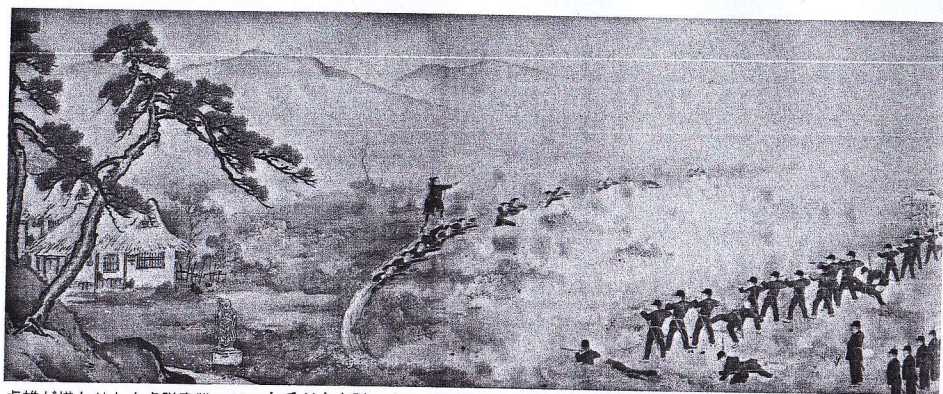
一方、『顛末記』は次のように記している。

戦争の事

終夜語り尽して早や八月二十三日、進撃の時刻となりける。茲に意外なるは隊長日向内記の影だに見えず、一同願て呆然たり。此の時早くも教導の一人なる篠田儀三郎、揚言すらく、吾は教導の首席なるを以て、代わりて隊長の任務を執らんと。直に気を付けの号令を発し、人員点呼を行えり。其の点呼終わらずや否や、進めの号令を発せり。流石に死を決したる隊士、一人として篠田の進軍の令に違背するものなく、全軍肅然として戸ノ口差して行進す。



戸の口原拠点A日野塚付近。この道路右手を入ったところに凹地がある(羽角氏提供)



貞雄が描かせた白虎隊奮戦の図 左手が白虎隊、立って指揮しているのが篠田儀三郎。右手は新政府軍。絵師は梅里。
(原寸は41cm×107cm)

まだ戸ノ口に達せざるに、銃声次第に間近く聞えける。是れ愈々敵兵に接近せるを覚えたり。然るに戸ノ口原上一つも障壁と為すべきものなかりしが、幸いに水なき溝あり、一時の急悉く其の溝内に潜伏したり。(戸の口原拠点B、拠点Aから約一km地点)敵兵は既に戸ノ口の味方を打ち敗り、若松街道を幕直に発射しつつ進み行けり。此の間の距離は百米ばかり。突然側面より敵兵を認むるを得たり。此に於いて篠田打てと令するや、一同溝内より連発す。敵兵初めて我が兵あるを知り、狼狽を極め、散乱したるものの如し。然れども暫くにして敵兵我が陣に向いて発射し、弾丸の飛来すること雨の如し。茲に隊士死力を尽くし、銃身熱し手にすること能わざる迄発射すれども、僅かに一個中隊の能く防御し得べきにあらず。味方の死傷、殊に多く、殆ど全滅に垂んとす。茲に於いて、流石に篠田も最早当り難きと思ひけん、引け引けの号令を為し、白刃を振りて真先に立ち、退却す。少し重複するが、河北文では次のようになっている。

(一)は筆者。

未夜も更け初むる十時頃、隊長の日向は、敢死隊に用があるからと、その趣を篠田に

告げて、一人隊を離れて出て行つた。そのまま隊長は、遂に隊へ帰つて来ない。

翌朝の四時頃、篠田が号令をして、一同を整列させる。点呼をして人数を調べる。この時までも隊長の日向はまだ帰つて来ぬ。それを待つて居た日には、徒に時機を失するの恐れがある。そこで篠田が代わって指揮を執ることになった。一隊六十余名(一七名の誤り)の少壮軍、ことに新たな勇を振るつて、歩武肅々と前進する。夏の朝風涼しくも、草踏み分くる道の辺に、玉と砕けて散る露の、いのちを誰か惜しむべき。

行くこと十町(約一km)ばかりにして、前方の一と叢木立の間に、正しく敵の影が見える。而もなかなか優勢らしいのだ。また、『白虎隊の人員』では、以下のようになっている。

苦戦の状況 (一)は筆者付記。

苦戦の状況は、先便御報道したる如くなるも、白虎隊士の潜伏したる溝内は其の幅約五、六尺、前面堤防の高さ約二尺乃至三尺位なるを以て、隊士の敵弾を受けたるものは何れも胸部以上に在り、即死者最も多く、尸屍累々堆積し、我が砲声の漸次減少

朝四時〜六時頃であろう。

一方、酒井文は次のようになっている。

(一)は筆者付記。

(山内隊は)赤井谷地に転じて敵を挟み撃ちにしようとした。敵は本道の兵を追つて城下に達している。我隊は側から敵を銃撃したが、効果はなかった。退軍の命令により、時に八月二十三日、(前日の)大暴風雨の為、新堀の所に至り身を潜めた。そこで高さ五、六尺の土堤に攀じ登り、敵が来るのを立ち上がつて狙い撃ちするのは、独り石田和助である。時に伊藤俊彦の姿が見えず、戦友大いに心配している処へ、俵の棧俵(米俵の両端にある、藁で編んだ丸くて平らな蓋)を被つてやつて来たので、その豪胆さに驚かない者はなかった。また、原田談は次のようになっている。

(一)は筆者付記。

十三日の(二十三日朝)味方七人(隊士四人)を率いてあの溝渠にたどりて遠く進み東方より射撃した。まもなく本体(山内隊)は敵に追われ自分等はあまりに進み居りしため重囲のうちに陥つた。止むを得ず迂回して原街道に出で杵掛の坂に赴きしに所々に死屍あり 坂下には数多の敵兵あ

するを覚ゆ。中には重傷を負い、戦友を呼び介錯を請うものあれも、相顧るの暇なかりき。教導篠田儀三郎は溝内隊士列の中央に座を占め、白刃を振り左右を顧み、之が指揮を為せり、又弾も尽きたるとき、若しくは敵弾を受け銃器の破損したるときは、近隣の死傷者の銃器若しくは弾丸を取り来り、発射を継続せしものなりと云う。

また、貞雄は後年、飯沼家出入りの絵師梅里に戸の口原の戦いの絵を描かせている。右側で横一列になっているのが西軍、左側で塹壕に入っているのが白虎隊、立って指揮を執っているのが篠田儀三郎である。白虎隊士は一六名描かれており、うち一名は顔をのけぞらせ、一名は土手に伏している。貞雄は胸部から上を撃たれ即死した隊士と、介錯を頼んだ隊士がいたことを明記しているから、図はそれらを描こうとしたものであろう。篠田隊は一七名であるから、一名は塹壕の中で倒れているのだらう。一方、対する敵は二列横隊で整然とした立ち撃ちの体制であるが、三名が倒れて描かれているから、白虎隊も少なくとも三名は敵を倒したのであろう。そして、池上新太郎、伊東梯次郎、津田捨蔵の三名はここで戦死したものと考えられる。時刻は早

り。乱射するにより再び東方に退き赤井山を撃つ。此辺にて部下の一人田賀谷落伍せり。

酒井、原田文は分りにくいところがあるが、貞雄文を合わせて考察すると、次のように推定できる。

- ①戸の口原拠点Aから、約一km先の戸の口原拠点Bに進軍したのは篠田隊のみである。
- ②拠点Bには溝があつたので、これを胸壁として戦った。この地点を最近羽角氏が発見したので、写真に示す。
- ③この戦闘で戦死者が出た。この時、戦つたのは一七名で、死者は三名と思われる。
- ④篠田隊が拠点Aを離れた後、山内は篠田のように、隊士全員を統率してはいなかった。
- ⑤原田は前日斥候に出た山内隊所属の隊士四人を率いて、別行動に出た。
- ⑥山内隊のうち、血気にはやる者はじつとしていることが出来ずに、思い思い近くで戦闘に参加しようとした。
- ⑦西洋式軍隊訓練の成果を発揮して戦つたのは篠田隊だけだった。

三十五 退却状況

(二十三日六時〜八時頃)

まず、『顛末記』では次のようになってい

会合之事

引けの号令を聞くや、各隊士は溝内を出て篠田に尾して退却す。行くこと約二十丁許にして、初めて敵兵の追撃を脱れたり。然れども砲声は尚、遠く聞こえり。茲に何人か供養の為建立せる見上げる許の大なる石地蔵あり。其の周囲皆芝生にして、足を休むるに適せり。

爰に於いて人員点検するに僅かに十六名なり。其の氏名、左の如し。

篠田儀三郎、安達藤三郎、井深茂太郎、永瀬雄治、林八十治、西川勝太郎、野村駒四郎、有賀織之助、間瀬源七郎、鈴木源七、飯沼貞吉、津川喜代美、築瀬勝三郎、築瀬武治、伊藤俊彦、石田和助、是ぞ飯盛山に於いて自刃したる少年なりき。

河北文では、勢い如何ともする能わず、篠田は遂に退却を命ずる。やがて徐かに兵を纏めて、前夜露営した場所まで退却した。それからここで人数を点呼して見ると、この一戦に生

き残ったものは、僅かに十六名である。即ち一隊の四分の一だけが、撃ち漏らされたのである。

この兵力では、到底再び事を為すに足らぬ。止むを得ず一たび城中へ引揚げよう、ということに一決した。

前きに敢死隊の居た宿へ戻り着いて見ると、それらしい人影は一人もなく、そして戦死者の死屍が、そこにもここにも取り残されてある。察するに、敵は既にこの辺まで進入して、我が兵を撃退したものらしい。満目凄愴、敵に蹂躪された一寒村の、戦敗の痛ましい光景は、更に我が一隊の恨を深らしむのであった。

一方、酒井文は次のようになってい

(一)は筆者付記。
二十三日(の朝七時〜八時頃)、赤井新田を引き揚げ、江戸街道を経て穴切坂を下り、若松を指して西へ向かう。その左に山路があつた。その時、山内小隊長が後から来て、山路に入り、隊士に「お前達、何処へ行こうとしているのだ?」と訊いた。石山虎之助が進み出て、大声を發し、「吾掛に赴いて決戦するつもりです」と答えた。小隊長は、「敵は大軍にて我らは少勢、徒に大

死にするよりは我に従い、一旦敵を避けて再起を図ろう」と勧められた。虎之助は憤然として、「小隊長はよもや腰を抜かされたのですか?」と言った。小隊長もまた憤然として、「勝敗を見極めずして進んで死のうとするのは、子供の了見に過ぎぬ。我が指揮に従い、ついて来るべし」と言い捨て、山路に向かつて去られた。全隊もその後に従おうと徐々に歩き始めたが、遂に小隊長を見失い、路が三方に分かれた処に出た。

また、原田談は次のようになってい

(一)は筆者付記。
それより數をぐり岩を越え互に声をかけ合せて進みしに、とある茸小屋に出で、とがぬ米五合と松茸若干を煮て貰い腹をこしらへ猶も進んで漸く愛宕山の頂上に出た。愛宕山のとつぺんより御城を見れば火焰が盛んに起る。がっかりして一同死を決し道具を投げ出し環坐して切腹せんとした。偶 敢死組の一人小池辰吉来り軽率に死するはよろしからず御城の安否を確めて進退すべしと異見を加えらん。我にかえりて見れば未だ天主閣見ゆ。因つて一同に腹を切るは容易なり大死となるは口惜し。敢

白虎隊士中二番隊の行動

行動番号	日時	隊名(人数)	行動	場所	隊名(人数)	行動	場所	隊名(人数)	行動	場所
1	8/22 午前10時	士中二番隊(37)	集合	鶴ヶ城内						
2	8/22 午後2時	士中二番隊(37)	護衛出陣	滝沢本陣						
3	8/22 午後4時	士中二番隊(37)	応援出陣	金堀、強清水						
4	8/22 午後6時	篠田隊(14)	宿営地 胸壁造り	会津軍宿営地 敢死隊と一緒に	原田分隊(7名)	臨時斥候隊 隊結成	宿営地に戻る	山内隊(16)	宿営地 胸壁造り	会津軍宿営地 敢死隊と一緒に
5	8/22 午後10時〜翌朝4時	篠田隊(17)	3名戻り 露営	戸の口原A	所屬隊に戻る			山内隊(20)	4名戻り 露営	戸の口原A
6	8/23 午前4時〜6時	篠田隊(17)	前進・戦闘 3名戦死	戸の口原B 懸崖	原田分隊(4名)	独立行動		山内隊(16)	待機	戸の口原A
7	8/23 午前6時〜10時	篠田隊(16)	2名合流 退却	戸ノ口原A → 露営地 → 滝沢坂	原田分隊(4名)	退却	赤井山	山内隊(12)	退却 綿城を目指す	露営地→綿城
8	8/23 午前10時〜12時	篠田隊(16)	退却 自刃	飯盛山	原田分隊(4名)	休憩	愛宕山	酒井	退却	白雲山
9	8/23 午後〜夕				原田分隊(4名)	綿城	鶴ヶ城へ	酒井 伊東又八郎	退却	松茸山
10	2009/8/24〜25日							酒井	綿城	鶴ヶ城
参考文献		白虎隊顛末記(飯沼貞雄、原新太郎)			原田伊織翁の直話(秋月次三)			酒井峰治戊辰戦争実証談		

て腰をぬかしたるにあらず一人にても敵を多く殺して死な

んと相談せしに一同同意せるにより再び結束して愛宕祠に下り水尾に就きて御城の安否を質せしに未だ落城せず。あの通り鐘を撞くのと我等は大に喜び速かに入城して上の御安否を伺わんと勇み立つ。

以上から、筆者はこの退却状況を以下のように推定する。

①敵の圧倒的な勢力の前に、白虎隊士は退却を余儀なくされた。

②前線で三名を失った篠田隊一四名は、まず、拠点Aまで退却した。ここで、山内隊に出会い、石田和助と伊藤俊彦が篠田隊に加わって一六名となった。

③石田と伊藤は酒井と同じ山内隊だったが、血気盛んな性格であり、消極的な山内を見切り、統率力のある篠田につい

ていった。

④石山虎之助は同様に山内隊から離れ、一人遅れて篠田隊の後を追った。

⑤篠田隊は一旦会津軍宿営地に戻つてみたが、そこは既に敵に蹂躪され、死体が散らばり、誰もいなかった。

⑥山内隊一三名(二〇人から原田隊四人、石田、伊藤、石山を除く)は綿城を目指した。

⑦酒井は途中で山内隊からはぐれてしまい、一人彷徨った挙句、愛犬クマに出会い、後日入城した。

⑧原田隊の四人は愛宕山で自刃しようと考えたが、途中で敢死隊の一人に諫められ綿城に成功した。

四 飯盛山での

自刃の決定プロセス

『顛末記』では、人員点検の結果一六人であることを確認し、その全員の氏名を明らかにした上で、次に続けている。

飯盛山に登る事
茲に初めて前夜の疲労を覚ゆ、且つ空腹に耐えざれども、近傍食を乞うべきの家

なし。幸いにも十六士中には前夜の残飯多少腰にするものあり。是れ能く各自の腹を癒するに足らざれども、一時の飢え凌ぎんとて腰より残飯を取り出し、之を石地蔵の前なる凹石内に投入し、水を加え手にて之を混ぜ、十六士送（交互に）に手ずから之を食い、稍々氣力を得るに至れり。

而して、偕に若松城に入らんとして徑路を南方の山間に取って退ける。如何に岐を踏み違ひしにや、忽然若松街道なる滝沢坂の麓に出にけり。然るに滝沢坂を降り、若松城を差して行進する幾多の軍兵に遭逢す。之れ將た敵か味方か遡巡、之を試るに合詞を以てせり。彼れ之が応を為さざる而已（ばかり）ならず、忽ち銃を向けて打ち出せり。茲に始めて敵兵なるを知り、直に南方の山腹に副て退きける。此の時、永瀬雄治、股を打たれて仆る。衆皆之を擁し、敵の射撃を脱し、飯盛山に登りて足を止む。暫く西、若松城を望めば、炎焰は天に漲り、砲声は地に轟く。北、滝沢街道を看れば、敵兵の行進する其の数幾許なるを知らず。南、天神口を顧れば、関（ひつそり）として未だ敵兵の掠めざるもの如し。今や満目の有様、斯の如し。血氣の少年、

城は古の英雄蒲生氏郷の築ける名城なり。一朝幾多の兵、之を攻るも容易に取るを得ず。今や焰は天を焦がし、砲声山岳を動かすも、決して城落たるにあらず。潜在道を南に求め、若松城に入るに如すと。甲怒り、乙罵り、激論以て之を争う。

篠田儀三郎曰く、最早斯くなる上は策の講ずべきなし、進撃の計、城に入る謀、元より不可と云うにあらずれども、逆も十有余士の能く為し得べき所にあらず。誤つて敵に擒にせられ縄目の耻辱を受ける如き事あらば、上は君に對して何の面目やある、下は祖先に對し何の申訳やある如かず。潔きよく茲に自刃し、武士の本分を明にするにありと、議論爰に始めて定まり、徐（おもむろ）に用意を為し、慶応戊辰年八月廿三日巳の刻（午前一〇時）過ぎなりき、一同列座し西方鶴ヶ城に向え遙拝訣別の意を表し、從容として皆自刃したりき。

一方、河北文では
遙かに城の方を見て見ると、ああ何事ぞ、城は今一面に炎々と燃え上がりつつあるのだ。そしてその方向に當りて、時々大砲の音も烈しく聞かれるのである。更に目を移して、我が住宅の方を見ると、昨日までも

茲に始めて悄然（しよげん）たり。

「残していた握り飯を凹石内に入れ水を加えて、皆で手ですくって分けて食べた」というくだりは、その場の情景がありありと伝わってきた、涙を禁じえない。また、この時、滝沢方面は多数の敵軍がいて、永瀬雄治が股を撃たれて負傷したのを皆で助けながら、洞門（猪苗代湖の水を城下に引き込むために造られた水路）を潜って飯盛山にたどり着いた。この部分、河北文では、以下のような略同じ表現になっている。

乃ち道を転じて間道に入ると、この方面にも又た敵らしいのが出没する。試みに暗号を以て呼びかけて見ると、先方のものは一向に応答をしない。反つて此方へ撃ちかかって来る。さては敵に相違ない。然るに我は今朝からの戦に十分疲れ切つて居るのみならず、その人数は僅かに十六名というのだ。この上有効な戦闘をつづけ得べき見込みもない。寧ろ如かんや、一たび敵を避けて、而して城兵に合せんには。ここに於て一隊十六名、更に道を転じて、左の方、飯盛山に向かう。この山は、一藩の少年が常に遊び場所として居た所なので、白虎隊の面々にも、そこらの地理は、よく十分に

知れてある。それで今日も、間道から敵を避けて山へ上つたのである。十六名のうちの一人は、脚部に負傷して居たために、歩行が頗る難渋に見えた。戦友は互にそのものを労わりながら、途中弁天堂で小憩をして、更に頂上に登り着いた時は、日も既に高き午前十一時頃であつた。

さて、白虎隊士が自刃を決意した理由は「お城が燃えていると思ひ込み、殿の後を追つた」というのが通説である。これは一般受けする説明かもしれないが、皆がそんな風に錯覚するのは少し幼稚すぎる。誰にとつても、死ぬことは一大事で、全員の意思統一を確認して自刃するにはそれなりのプロセスがあつたに違いない。貞雄はこう記している。

自刃之事

斯て果つべきにあざれば、爰に一同足を停めて議す。野村駒四郎、進みて曰く、今や満目の有様斯くの如し。臣士に分君に尽くすは正に此の秋なり。寧口（おだやか）にいう）今行進する滝沢街道の敵軍を衝き、斃して後に止んと。井深茂太郎曰く、国に報ずるの今日、敢て寸時の命を惜にあらざれども、曾て父母の物語に聴けり。若松

住み馴れて、見馴れて居たる杉林のあたりから盛んに燃え上がる火焰が、渦を捲いて半天に立ち騰るのが、明白地に望み見られるではないか。万事遂に休せり、我が事既に了れり。我等はこの際只だ国と共に死するの一あるのみ。

尤も中には、弾尽き銃折れるまで奮闘して、然る上に潔く死ぬべきである、という議論をするものもあつたのだが、隊長の篠田は、尚自説を取りて、この山に於て一同自刃しよう、と主張する。爾他の面々もこれに同意をして、遂に自刃ということに決した。

この日の未明午前四時頃に戦闘を開始してから六、七時間後、飯盛山から見た城下は砲煙に包まれ、城も燃えているように見えた。しかし、ここで、喧々諤々の議論が起つた。

「甲怒り、乙罵り、激論以て之を争う」という表現は血氣盛んな若者の現場の雰囲気やよく伝えている。そして、篠田は、主な論点を、①敵陣に突入し玉碎するか、②入城を目指すか、の二つに集約した上で、自刃の断を下した。その理由は、「捕虜になつて敵の恥辱を受けるようなことになれば、君公と祖先に申

し訳が立たない」ということだつた。①案と②案のいずれにもその可能性があつた。そこで、結論として、「潔く自刃して、武士の本分を明らかにする」道を選択した。これにはもう誰も反対しなかつた。彼らは十分に言いたいことを言い、議論を戦わせ、冷静且つ論理的に結論を導き、全員が納得してこれに従つたのである。

会津日新館に学ぶ者は毎月一回全員が『日新館童子訓』を叩き込まれた。その第一条は三大恩と呼ばれ、朱子学を反映したものだつた。

「人間は三つの恩があつて生きてゐる。父母はこれを生み、藩主はこれを養ひ、師はこれを教える。父母がいなければ生まれる事は無く、藩主がいなければ成長する事も無く、師がいなければ物事を知る事は出来ない」

さらに、第二十条には、死の美学を謳つた。「自分自身の身体は、両親から伝え残された大切な賜であるから自分自身のものであつて自分自身のものではない。誰もいない時にも心を正しく、良心に恥じない様に努め、道に背いた行いや不屈きな行為はしてはいけない。戦場にある時、勇敢に戦わない事は孝行ではない。勇敢でないという事は、君恩を忘



貞雄が描かせた白虎隊自刃の図 右手が鶴ヶ城。16人が描かれている。服装、頭髪は揃っている。絵師は梅里。

(原寸は41cm×107cm)

れ、義を重んじる事無く、命を惜しむ事であり、それは未練から起こるものである。死すべき義に当った時に死ななければ、汚名を永遠に残す事になり、人に爪弾きされてそれられ、両親までもが辱められ、生き甲斐さえも無くなってしまうだろう。

同じ日の同じ時刻頃、西郷家の女性達是一家二人自刃した。理由は「敵からの恥辱を未然に断つ」というもので、彼らと彼女らの意識は『童子訓』を通して共通だったといえる。

「年若き少年達の錯覚」とか「隊長不在による判断の誤り」というのは、彼らに対して失礼な言い方ではないかと思う。読者の皆さんがこの場にいたとしたら、彼らの結論にどう応えただろうか？

なお、顛末記の自刃の記述には、『飯盛山五点セット』は出てこない。

飯盛山五点セットとは、富田国衛氏とみでくにゑがその著書『戸の口原の戦い』で使った用語で、自刃劇を脚色する五つの常套手段、すなわち、①飯沼の「あずさ弓」の朗詠、②篠田の文天祥の吟詠、③石田のお先ご免、④林と永瀬の差し違え、⑤野村の介錯、の五点である。この五点セットの原典は明治三十二年に発行された『西郷隆盛一代記』の第五八話に村井弦

斎さいが書いた小説である。平石はこれを全面採用し、飯沼氏談の中に盛り込んだ。その後、大正十三年に昭和天皇（皇太子）が、飯盛山を行啓されたときに御前講演に当たった滝本大尉が、これを採用し、以降飯盛山自刃物語では必須の要素となった。

『白虎隊の人員』には、この五点セットに関して、何も記載されていない。つまり、貞雄は平石本に記載された『五点セット』を読んだ上で、これを黙認したのだろう。貞雄が描かせた『白虎隊自刃の図』を見ると、『五点セット』と矛盾する雰囲気は感じられない。貞雄は五点セットがこの時の心情をよく表現していると思ったのかもしれない。

五 飯盛山白虎隊士墓はなぜ一九か

白虎隊の墓標が出来たのは明治十七年であるが、墓標には自刃者氏名は記されていない。飯盛山に白虎隊の銘々碑が建立されたのは、明治二十三年で一九士の墓がある。この碑の建設に向けて、自刃者の遺族や関係者に対して精力的な追跡調査が行われ、明治二十四年に発行された二瓶由民著の『白虎隊勇士列伝』

に一九士が紹介された。その後発行された、中村謙著の『白虎隊事跡』にも一九士が掲載されている。

出陣した三七人の白虎隊士から生存者を差し引くと、その数は三七―一八―一九である。貞雄が『顛末記』に記した一六人の氏名は明治二十年発行の関場忠武著の『会津一六士伝』に掲載されている。つまり、これに、石山虎之助、池上新太郎、津田捨蔵、伊藤梯次郎の四人が追加され、貞雄が除かれて一九人になった。

青森県三戸市にある日本最古の白虎隊墓碑には石山が入っており、明治十年頃製作したといわれる『忠臣義士』と題した白虎隊自刃の図に付記された一六人にも石山が入っている。これらのことから、石山は遅れて飯盛山に辿りつき、皆の後を追って自刃したものと考えられる。

残る三人は篠田が指揮した戸の口原の聖壕で戦って戦死したのだろう。貞雄は飯盛山銘々碑が一九人になったことに關して、なら異論を挟んでいない。自分と一緒に自刃したのは一六人であることは曲げられない事実だが、あの日に命を落とした白虎隊士の臣節は、場所や時刻に関係なく同じだからである。

六 むすび

会津白虎士中二番隊の戦闘状況を飯沼貞雄が残した新資料を使って分析し、これまでに知られていなかった三七人の隊士の行動全貌をある程度明らかにできた。西洋式軍事訓練を受けた血氣盛んな少年白虎隊士が、待ちかねたこの日とばかりに前線に出陣したが、三〇〇人とも言われる敵軍が相手では如何ともしがたかったのは当然である。その中で、篠田隊一七名は敵軍とまともに交戦し、幾ばくかの戦果を挙げたのは立派だったと言いたい。他の白虎隊士は、押し寄せる敵の大軍を前に退却を余儀無くされ、指揮も戦列も乱れ、散り散りになって帰城した。日頃の訓練の成果を披露できなかったことに、忸怩たる思いが残ったであろう。篠田隊はその後飯盛山で集団自刃するが、その意思決定プロセスは、思う存分意見を出し合い、議論を戦わせ、最終的に全員一致の意思統一を得て、自刃したことが明らかにな



会津飯盛山白虎隊19士の墓

った。彼らの結論は会津の教え、「ならぬことはならぬ」を守ることだったといえよう。なお、本稿では『隊長日向内記』にふれなかったが、機会があれば別稿で取り上げたい。

参考文献一覧 発行年順に掲載

★は入手が比較的難しいと思われるもの

- ★『樺崎頼三陣中日記』 樺崎頼三 明治元年十二月
- ★『白虎隊十六士傳』 関場忠武 明治二十年十一月十五日 野史台維新史料 第三編
- ★『白虎隊勇士傳』 二瓶由民 明治二十四年一月二日 私家版
- ★『白虎隊事蹟』 飯沼貞雄君の事蹟 中村謙 明治二十七年六月 河井源藏編 国会図書館
- ★『会津藩白虎隊顛末略記』 飯沼貞雄 原新太郎 明治三十五年十月 私文書（未公開）
- ★『飯沼貞雄談による白虎隊史略』 河北新報社 明治四十三年六月二十七日～七月三日
- ★『会津戊辰戦争』 平石弁藏 丸八商店出版部 大正六年（昭和四年増補版）
- ★『白虎隊之人員』 飯沼貞雄 大正六年 私文書（未公開）
- ★『補修 会津白虎隊十九士傳』 宗川虎次著 山川健次郎補修 大正十五年 会津市靈義会
- ★『舊夢 会津白虎隊』 永岡清治 大正十五年 私家版
- ★『白虎隊生存者飯沼貞雄翁の蘇生実話』 芳山史哲 大正十五年十月二十八日 新東北第一七卷一九〇号
- ★『白虎隊の真相』（生存者飯沼貞雄追憶談） 富田廣重 昭和五年十一月十五日 東北の秘史逸話 第二号
- ★『会津戊辰戦争史』 山川健次郎監修 会津戊辰戦争史編集会 昭和八年 勉強堂書店（平成十年復刻）
- ★『白虎隊自刃者二関スル調査経過』 吉村五郎 昭和十一年 会津若松市立会津図書館蔵
- ★『辰のまぼろし』 柴五三郎 会津若松市立会津図書館蔵

★『原田伊織翁の直話』 秋月次三

会津若松市立会津図書館蔵

★『史実 会津白虎隊』 早川喜代次

昭和五十一年 新人物往来社

★『戊辰戦争実証』 酒井隆治

平成一年発行、平成五年白虎隊記念館寄贈

★『会津白虎隊のすべて』 小松山六郎

二〇〇二年二月十日 新人物往来社

★『戸の口原の戦い』

平成二十年六月二十日 富田国衛 おもはん社

なお、★印のうち主な文献はWEBサイト『白虎彷徨』に掲載してある。

【白虎隊の会】

四月一日発足します。

白虎隊の子孫や研究者、ファンらが情報交換できる「白虎隊の会」を設立します。

三百人以上の白虎隊全体を対象に史実の調査・研究や交流に取り組みます。白虎隊にまつわる史跡、出版物、愛好者は沢山存在しますが、現在はバラバラです。この現状に求心力を持たせ、風化させることなく、白虎隊の「義」を後世に伝えていくことが目的です。

活動は調査、交流、企画が三本柱で、発起人は東京、京都、福島在住の歴史愛好家や西郷家、山川家、飯沼家の子孫。

企画としては各種イベント開催やファンくらぶ開設などを予定。入会資格は不問。年会費三〇〇円。

【問い合わせ】

電話〇三三四二九一六六五二

飯沼一元まで。

ホームページは

<http://byakko1868.web.fc2.com/>

PROFILE

飯沼一元

いぬま かずもと



1943年、仙台市生まれ。蘇生白虎隊士飯沼貞吉（後貞雄）の直系の孫（貞雄二男一精の三男）。1961年、宮城県立仙台第一高等学校卒。1965年、東北大学工学部電子工学科卒。1970年、東北大学で工学博士取得。同年、日本電気（株）へ入社。研究所で画像処理を担当し、MPEGの基本特許発明。後、本社理事支配人。2002年、(株)ライステックを設立し、「食べる米ぬか」のベンチャー事業に携わる。著書に1989年、「入門と実習 ニューロコンピュータ」技術評論社。1992年、「これが認識技術だ」日本電気文化センターなどがある。

白虎隊顛末略記

口述…明治二十五年十二月 於いて広島市上流川町 飯沼貞雄
 記録…明治二十七年一月 広島市鉄砲町 原新太郎
 清書…明治三十五年十月 仙台市北六番町 原新太郎
 朱書…明治三十七年 仙台市 飯沼貞雄

教育之事

藩立の学校を日新館と云えり。当時藩士の子弟は各其の身分の階級に拘らず読書・習字、併に弓馬槍刀の四術必ず其の館に就き修めたるを得ざる制度なりし、然らざるときは嫡子は其の家督を相続すること能わず、次三男は年長するも退館すること能わざりき。蓋し年齢概ね十歳にして日新館に入りて読書を学び、十二歳にして習字をなし、十四歳より弓馬槍刀の四術を修む。又、定期試験ありて、其の優等及第者には藩主より褒賞せらる。即ち習字に在りては硯、読書に在りては四書、小学、近思錄、且つ其の授与式には国老之れに臨み、優等及第者の父兄列席の上、其の賞品を受く。故に年齢十六七歳に達するときは、多少文武の覚えなきもの寡なかりき。今其の当時の流派併に教場の概略を挙ぐれば、左の如し。文は朱子学にして山崎闇斎派なり。而して其の教場は、毛詩塾、三礼塾、尚書塾、二経塾の四個に分たれ、外に一の大学校あり。後に幕臣林正十郎なる人來會あり、仏蘭西学を教授す。書は尊圓、瀧本、華様の三流にして其の教場四個、弓術は日置流印西派、日置流道雪派、豊秀流、馬術は大坪古流、大坪新流、槍術は大内流、日下一旨流、宝蔵

兵式訓練之事

年齢に因り組織せられたる歩兵隊は、幕臣畠山五郎七郎なる一を主腦とし、其の他五、六の幕臣より仏蘭西式の訓練を受けた。當時幕府に於いては仏國人シャノアンなるものを招聘し、幕臣に専ら軍事教育を受けしむ。畠山氏は其の教育を受けた人にして、会津に來たり、軍事教育の任務を掌り。訓練稍や熟するに及んで白虎二個中隊は常に山野を授歩し、発火演習を為し、練銃最も巧みにして進退殊に敏活なり。爰に白虎隊士の携えたるは仏國製「ヤーゲル」と稱すものなり。其の他の歩兵隊の携えたる銃器は同じく仏國製にして、二つバンド先込め銃なり。砲兵、騎兵の銃器及び大砲も均しく仏國製なり。又、砲兵、騎兵も他の幕臣より訓練を受けた。

出陣之事

茲に隊長原早太の率いる寄合組白虎隊は、補充兵として出陣し、既に越後口石間の関門に於いて戦い、戦死者数名あり。其の負傷者九名後送せられ、若松の病院にて治療せり。然るに士中白虎隊士も同じ年齢の事として流石に哀憐の情熱止し難く、屢負傷者を病院に慰問し、親しく戦場の実況を聴き感慨一方ならず、且つ常に訓練を共にしたる寄合組白虎隊に後れたるとの感情を惹き起こし、今は血氣平生に倍加し、寸時も早く戦場に臨まんとことを熱望せり。折柄八月二十二日、石筵口の敗報若松城に達するや、藩主直に滝沢坂に出馬せられたり。此の時君側の護衛として、隊長日向内記の率いる士中白虎隊、初めて出陣するを得たり。君側の護衛、其の任甚だ重けれども、腕に武術練の覚えあり、且つ寄合組白虎隊に先ぜ

院流、刀術は真天流、一刀流、太子流、安光流、精武流なりとす。而して各流派毎に其の教場を異にせり。其の他、礼式には小笠原流、兵学には長沼流、築城には山上流なりとす。又、医学・和学・柔術・算術・水練の術等師範ありて、馬術の外教場都て日新館内に備われり。右の外、尚各塾毎に各朋友の組合あり。其の組織は長幼の順序に因て成立し、團結尤も凝固なり。是れ、善を責め惡を懲し、武士道を研く所の機關なり。今、其の組合は、五ノ丁、四ノ丁、徒ノ町、水主丁、小田垣、二ノ丁、米代、花畑、御厩町、本丁、新町の十一組に分れた。

隊各之事

國難に際し、軍隊の組織改正せられたり。其の内年齢により組織せられたる歩兵の隊名を、玄武、青龍、朱雀、白虎と云えり。之れ四神を象りたるものにして、玄武隊の年齢は五十才以上六十才まで、其の任務は國境関門若しくは各要所の関門を固むるに在り。青龍隊の年齢は四十才以上にして、其の任務は後備軍なり。朱雀隊の年齢は十八才以上にして、其の任務は先鋒軍なり。白虎隊の年齢は十六才及び十七才にして、其の任務は君側を護衛するに在り。白虎隊は、二個中隊に編成せらる。其の一個中隊は日新館學生にして身体強壯、技術優等のものより之を選抜す。之を士中白虎隊と稱す。他の一個中隊は日新館以外の學生、即ち身分のやや低きものより之を選抜す。之を寄合組白虎隊と稱し、原早太が隊長たり。後に戸ノ口原の戦に敗れ、飯盛山に於いて自刃したる白虎隊士は、日新館より選抜したる一個中隊にして、隊長日向内記の率いる所の者なり。

られたるを遺憾とする少年、今は早や戦わんとするの血氣制し難く、直に戦場に臨まんとことを隊長に請い、遂に其の日の午尅後、戸ノ口表へ出陣の命令を受けた。茲に於いて隊士の怡悦大方ならず。隊伍肅々として滝沢、金堀、強清水等の各地を経て、戸ノ口原の西端に至り、他の軍隊と共に戸ノ口街道左側の丘上に陣を張り。然れども尚進みて先鋒たらんことを強いて請いて止まず為に、白虎隊のみ独立行動の許可を受け、他の軍隊を離れ、十余丁も進軍したる時に、細雨蕭々、日方に暮れなんとす。殊に進撃は明廿三日払曉と決しければ、戸ノ口原上に宿陣する事となれり。

明けなば討死と覚悟したる少年、三々五々彼の地此の地に団樂し、無言の中に慈母姉妹に別れを告ぐる折、飢えたるときの補いにもと与えられたる食物を腰より取り出し、之を食らい、俱に文武を学びたるの既往を談じ、又明けなば人に後れじとの心事を話し、寐る間もなく東天正に明けなんとす。

戦争之事

終夜語り尽して早や八月二十三日、進撃の時刻となりける。茲に意外なるは隊長日向内記の影だに見えず、一同顧て呆然たり。此の時早くも教導の一人なる篠田儀三郎、揚言すらく、腰抜け隊長何の狗や、吾は教導の首席なるを以て、代わりて隊長の任務を執らんと直に氣を付けの号令を為し、人員点呼を行えり。其の点呼終わらずや否や、進めの号令を發せり。流石に死を決したる隊士、一人として篠田の進軍の令に違背するものなく、全軍肅然として戸ノ口差して行進す。未だ戸ノ口に達せざるに、銃声次第に間近く聞こえける。是れ愈、敵兵に接近せるを覚えたり。然るに戸ノ口原上一つも障壁

と為すべきものなりしが、幸いに水なき溝あり、一時の急悉く其の溝内に潜伏したり。敵兵は既に戸ノ口の味方を打ち敗り、若松街道を驀直に発射しつつ進み行けり。此の間の距離百米ばかり。突然、側面より敵兵を認むるを得たり。此に於いて篠田打てと令するや、一同溝内より連発す。敵兵初めて我が兵あるを知り、狼狽を極め、散乱したるものの如し。然れども暫くにして敵兵我が陣に向いて発射し、弾丸の飛来すること雨の如し。茲に隊士死力を尽くし、銃身熱し手にすること能わざる迄発射すれども、僅かに一個中隊の能く防衛し、得べきにあらず。味方の死傷、殊に多く、殆ど全滅に垂んとす。茲に於いて、流石に篠田も最早当り難きと思ひけん、引け引けの号令を為し、白刃を振りて真先に立ち、退却す。

会合之事

引けの号令を聞くや、各隊士は溝内を出て篠田に尾して退却す。行くこと約二十丁許にして、初めて敵兵の追撃を脱れたり。然れども砲声は尚、遠く聞こえけり。茲に何人か供養の為建立せる見上げる許の大なる石地蔵あり。其の周囲皆芝生にして、足を休むるに適せり。

爰に於いて人員点検するに僅かに十六名なり。其の氏名、左の如し。

兵庫二男	篠田儀三郎	十七歳
雄之助弟	安達藤三郎	十七歳
守之進倅	井深茂太郎	十六歳
丈之助二男	永瀬雄治	十六歳

方か逡巡、之を試るに合詞を以てせり。彼れ之が応を為さざる而已ならず、忽ち銃を向けて打ち出せり。茲に始めて敵兵なるを知り、直に南方の山腹に副て退きける。此の時、永瀬雄治、股を打たれて仆る。衆皆之を擁し、敵の射撃を脱し、飯盛山に登りて足を止む。暫く西、若松城を望めば、炎焔は天に漲り、砲声は地に轟く。北、滝沢街道を看れば、敵兵の行進する其の数幾許なるを知らず。南、天神口を顧れば、関として未だ敵兵の掠めざるものの如し。今や満目の有様、斯の如し。血氣の少年、茲に始めて悄然たり。

自刃之事

斯で果つべきにあざれば、爰に一同足を停めて議す。野村駒四郎、進みて曰く、今や満目の有様斯くの如し。臣士の分君に尽くすは正に此の秋なり。寧ろ今行進する滝沢街道の敵軍を衝き、斃て後に止んと。井澤深茂太郎曰く、国に報ずるの今日、敢て寸時の命を惜にあらずれども、曾て父母の物語に聴けり。若松城は古の英雄蒲生氏郷の築ける名城なり。一朝幾多の兵、之を攻るも容易に取るを得ずと。今や焔は天を焦がし、砲声山岳を動かすも、決して城落たるにあらず。潜に道を南に求め、若松城に入るに如すと。甲怒り、乙罵り、激論以て之を争う。篠田儀三郎曰く、最早斯くなる上は策の講ずべきなし、進撃の計、城に入る謀、元より不可と云うにあざれども、逆も十有余士の能く為し得べき所にあらず。誤つて敵に擒にせられ縄目の耻辱を受ける如き事あらば、上は君に対して何の面目やある、下は祖先に対し何の申訳やある如かず。潔きよく茲に自刃し、武士の本分を明にするにありと、議論爰に始めて定まり、徐に用意を為し、慶応四戊辰年八月廿三日巳の刻（午前一〇時）過ぎ

忠蔵倅	林八十治	十六歳
半之丞弟	西川勝太郎	十七歳
卯之助弟	野村駒四郎	十七歳
勝平弟	有賀織之助	十六歳
岩五郎弟	間瀬源七郎	十七歳
玄甫二男	鈴木源七	十七歳
時衛二男	飯沼貞吉	十六歳
瀬兵衛倅	津川喜代美	十六歳
軍蔵弟	築瀬勝三郎	十七歳
克吉弟	築瀬武治	十六歳
亘倅	伊藤俊彦	十七歳
龍玄二男	石田和助	十六歳

是ぞ飯盛山に於いて自刃したる少年なりき。

飯盛山に登る事

茲に初めて前夜来の疲労を覚ゆ、且つ空腹に耐えざれども、近傍食を乞うべきの家なし。幸いにも十六士中には前夜の残飯多少腰にするものあり。是れ能く各自の口腹を癒するに足らざれども、一時の飢え凌ぎんとて腰より残飯を取り出し、之を石地蔵の前なる凹石内に投入し、水を加え手にて之を混ぜ、十六士遂に交互に手ずから之を食ひ、稍々氣力を得るに至れり。而して、偕に若松城に入らんとして径路を南方の山間に取りて退ける。如何に岐を踏み違ひしにや、忽然若松街道なる滝沢坂の麓に出にけり。然るに滝沢坂を降り、若松城を差して行進する幾多の軍兵に遭逢す。之れ將た敵か味

なりき、一同列座し西方鶴ヶ城に向え遙拝訣別の意を表し、従容として皆自刃したりき。

（時に明治二十五年十二月、広島市上流川町、戸枝某の宅に集りける折、飯盛山に於いて自刃したる一人にして蘇生せし飯沼氏より白虎隊士自刃の物語を聴き、茲に始めて其の真相を得たり。殊に自刃者中、安達氏篠田氏と日新館尚書塾に於いて俱に教育を受けたるのみならず、真に竹馬の交深かりき。今、其の真相を聴き、今昔の感に耐えず。故に其の事実を埋滅せん事を恐れ、之を書き綴るに当り、白虎隊の組織併に平生の教育等書記するにあざれば、恰も龍虎を画て其の眼を入れざるの感なしとせず。依て練筆之事より以上、余が記憶の儘に書き副て、白虎隊之顛末一打書と為したり這ば元より世に公にせんとには非ず。唯、余が朋友困難に斃れたる真相を永く家に伝えんとに在り。其の翌々二十七年一月、同市の鉄砲町に於いて誌す。其の後明治三十五年十月、仙台市北六番丁にて淨書す。

元会津若松米代一ノ丁

原 新太郎

平常大雅（花押）

(注一) 原新太郎は、「安達氏篠田氏と日新館尚書塾に於いて俱に教育を受けたのみならず、真に竹馬の交深かりき。元会津若松米代一ノ丁」となっているので士中二番隊の原親三郎の改名であろう。

※発見の経緯

発見のいきさつは二〇〇八年六月、西那須野の飯沼一浩(貞雄の二男一精の長男)宅で保管していた木箱に入った、貞雄遺品を整理していたところ、履歴書、従軍中の略歴等の下書きの書類の中から偶然発見した。

※書かれた経緯

飯沼貞雄は明治二十四年八月から通信省の広島電信局に勤務していたが、一年三ヶ月後の明治二十五年十一月三十日に東京転勤の辞令を受けた。そこで、広島在の戸枝氏が自宅で送別パーティを開いたときに、原新太郎氏も同席した。この席で飯沼山事件に話が移り、貞雄も自刃までのいきさつについて話した。原氏はこれを明治二十七年一月同市鉄砲町においてメモ書きし、その後、明治三十五年十月に仙台通信局に勤務していた貞雄宅を訪ねて清書した。その後、貞雄はこれを朱で修正し、元会津藩士の関五郎氏宛て文書の下書きとしたものであろう。

注) 明朝体は原新太郎氏原文

ゴシック体は貞雄の朱書

傍線は貞雄の削除部分

(一) 及び注は著者

白虎隊之人員

白虎隊は、士中白虎隊、寄合組白虎隊の二隊あり。其の人員、各八十人を以て一隊となす。又、其の一隊(八〇名)を二分し、之を小(中)隊と称す。即ち一番小(中)隊、又二番小(中)隊と称し、其の人員各四十人なり。各一隊(中隊四〇名)に隊長一名(日向内記)を置き、(中隊を二分して小隊とし)、各小隊に教導一名を置く。若し(中)隊長事故あるときは、一番小隊の教導(篠田儀三郎)之れに代わり、又一番小隊の教導之事故あるときは、二番小隊の教導(山内弘人)之れに代わりて指揮を執るの制なりき。故に、演習其の他の場合に於ては、渾て此の規定に基づき、履行し来りたるものなり。

而して隊長の任務は、藩主之を命じ、教導の任務は兵武の訓練稍や熟するに及んで、所屬隊長は軍事教育官と協議し、其の隊士中より之を選抜し、藩主の許可を受け、之を伝達す。

但し朱雀隊、青龍隊は大隊編成にして、大隊長、中隊長、小隊長及び教導若干名あり。各隊長は、藩主之を命じ、教導は所屬大隊長、軍事教育官と協議し、其の隊士中より之を選抜し、藩主の認可を受け、之を定むるの制なり。

白虎隊長の末路

後日聞くところに拠れば、隊長日向内記は戸ノ口街道に駐屯せし我が他の軍隊に用事あり、單身之れに赴きたるも、暗夜途を失し遂に翌朝に至り復帰せんとするとき、敵の襲撃に遇い、余儀なく閑道よ

白虎隊士の選抜に洩れたる学生

白虎隊士の選抜に洩れたる学生は失望措く能わず、屢々学校奉行若しくは教官に迫り、編入を請うと雖も許されず、止むなく平常の如く学校に於て文武を講究し居れり。然るに戊辰六月、学校を廃し病院となし、之れに負傷者を容取し、亦其の一部を以て弾薬製造所と爲すに至れり。茲に於て年齢十五才以上の学生及び白虎隊士に洩れたる学生を以て幼少組なる各一隊を組織し、之れに訓練を加えたり。後に籠城中此の幼少組は南郭門を固め、屢々城外追撃に加参し奇功を奏せり。其の進撃中、幼少組の一人なる石山九八郎なるもの、薩摩藩の爲に捕えられ、平和の後還送せられ、今尚お生存し、北海道にて相当の資産を有し、某村々長の職に在りと云う。

※原文は飯沼貞雄の直筆、那須塩原在飯沼一浩保管、二〇〇八年六月発見。

※この資料は、大正六年に出版された平石弁蔵の『会津戊辰戦争』の蘇生者飯沼氏の談の一部を補足するために作成した手紙の下書きである。

注) 明朝体は飯沼貞雄の原筆

ゴシック体は貞雄の朱修正

(一) 及び注は著者の解釈

苦戦の状況は、先便御報道したる如くなるも、白虎隊士の潜伏したる溝内は其の幅約五、六尺、前面堤防の高さ約二尺乃至三尺位なるを以て、隊士の敵弾を受けたものは何れも胸部以上在り、即死者最も多く、尸屍累々堆積し、我が砲声の漸次減少するを覚ゆ。中には重傷を負い、戦友を呼び介錯を請うものあれも、相顧るの暇なかりき。教導篠田儀三郎は溝内隊士列の中央に座を占め、白刃を振り左右を顧み、之が指揮を為せり、又弾も尽きたるとき、若しくは敵弾を受け銃器の破損したるときは、近隣の死傷者の銃器若しくは弾丸を取り来り、発射を継続せしものなりと云う。

苦戦の状況

り城中に入り、其の後間もなく城中に於て死去したる由、其の死去の原因は、藩中重役の非難を受け、自殺したるものの如し。而して戸ノ口街道(会津軍宿营地)に駐屯せし他の軍隊は、歩兵二個中隊と外に敢死隊なるもの二百余名あり。其の敢死隊なるものは、会津領地内に居住する神官、僧侶若しくは各郡村内に於て帯刀の許可を受け居たるものにして、困難に応ずべき志望者より之を抜擢組織す。而して彼等の携えたる武器は、槍、又は長刀等にして、各自其の好む所に任ず。之れ敵の襲来を待ち、突貫せしむる為なりと云う。

指揮を執りたる人

白虎隊長に代わり指揮を執りたる人は、一番小隊教導篠田儀三郎にして、之れ前項に記したる如く軍制の然らしむる所なり。而して白虎隊は人員少数の爲、小隊長を置かず、専ら教導をして小隊長の任務を掌らしむ、現時の曹長の如きものと存せらる。